西洋古代末・初期ビザンティン時代の史料に見られる
建築内装用大理石の意味についてFEATURES OF THE MARBLE REVETMENT IN THE ARCHITECTURAL INTERIOR
DESCRIBED IN LATE ANTIQUE AND EARLY BYZANTINE SOURCES

岩 出 ま ゆ *

Mayu IWADE

According to contemporary sources, the features and meaning of the marble for interiors in Late Antique and Early Byzantine architecture are as follows: 1) Marble, being used for columns, was applied abundantly to the wall and floor revetment. 2) Marble was usually called after the name of the place where its quarry existed. 3) Colors and patterns of the marble were compared to the beauty of the nature. Praising its splendor became a common expedient to admire the architecture and its owner. 4) Visual effects in color and pattern, as well as the decorative technique, determined the value of the marble. While points 1), 2), and 3) go back to the classical Roman period, point 4) is particularly Early Byzantine feature with increasing emphasis on the luxurious coloring and mirror image patterning.

Keywords : *Byzantine architecture, marble, Hagia Sophia, Constantinople, Ravenna*

ビザンティン建築, 大理石, ハギア・ソフィア大聖堂, コンスタンティノポリス, ラヴェンナ

1. 序

大理石¹⁾の建築への利用は、神殿建築における柱や梁などの構造材に始まり、古代ローマ時代には、アウグストゥスの帝国領の拡張以降導入された、様々な地方産の色大理石が、建築装飾に取り入れられるようになった。これを経て古代末期・初期ビザンティン時代には、ローマやコンスタンティノポリス(現イスタンブール)、ラヴェンナなどの現存例にも見られるように、大理石は、円柱や床、組積造建築の壁面化粧材空間装飾に不可欠な素材としてモザイクと並ぶ重要性を担っていた²⁾。

古代地中海沿岸で広く建築に用いられた大理石に関しては、1960年代以降、J.ワード・パーキンスやペンサベネらによる社会・経済的な背景を含めた研究の他、ニョリらによる文献学的研究、さらに科学的手法の発展に伴う産地同定技術に関する議論など、幅広い専門分野にまたがる研究が蓄積されてきた。しかし、これらの研究の主対象は、古代ローマ時代とルネッサンス時代の大理石であり、古代から中世へ向けての過渡期となる古代末期・初期ビザンティン時代の建築用大理石は、その重要性にもかかわらず、既往研究が看過してきた課題であった。それは、これら貴重な石材が、転用(スポリア)や戦利品としての収奪を受けて散逸し、現存例が非常に限られる上、残存する場合でも、多くの部分に修復や後補を受けているという困難な状況が一因となっている。

そこで本稿は、古代末期・初期ビザンティン時代(4~6世紀)の同時代史料を検討し、建築内装への大理石の使用状況を示す記述や、大理石の呼称、表現を整理しつつ、使用された大理石に対する同時代人の価値観や認識を明らかにすることを目的とする。

しかし、4~6世紀の同時代史料のなかで大理石に関する詳しい記述は限られており、その記述は、様々な分野の史料に散在している。建築に関わる同時代史料として、基本的な重要性をもつのはプロコピウスの『建築について』である。本研究では、この史料の大理石に関する記述を検討し、それより詳しい記述、或いは特徴的な記述を遺す史料を取り上げた。ここでいう特徴的とは、大理石に関する同時代の価値観を看取することができる記述内容という意味である。その結果、本稿で扱う同時代史料は、301年のディオクレティアヌス(Diocletianus)帝による『最高公定価格令』³⁾、5世紀のシドニウス(Sidonius)による詩や書簡⁴⁾、マルクス・ディアコノス(Marcus diaconos)によるガザの主教の伝記⁵⁾、そして6世紀ではコルキオス(Chorchios)の頌詩⁶⁾、プロコピウス(Procopius)が皇帝の建築業績を称えた『建築について』⁷⁾、パウルス・シレンティアリウス(Paulus Silentiarius)による562年のハギア・ソフィア大聖堂の献堂式のための詩⁸⁾、カッシオドルス(Cassiodorus)の書簡⁹⁾であり、比較のため、古代ローマ時代の史料も参照する¹⁰⁾。

このように考察の対象となる史料は、法令や韻文、年代記という

* 筑波大学芸術学研究科 大学院生・修士(デザイン学)

Graduate Student, Doctoral Program in Art and Design, University of Tsukuba, M. Design

性質の異なる分野にわたる。従って、これら各史料の表現と文体には史料の性質による違いが見られるが、各史料を検討してみると、実は後述のように、大理石に関する表記は、史料の特性の多様性に大きく左右されず、ある程度普遍性を共有していたことが知られる。この意味で、これらの史料は、大理石に関する限り、同時代史料の特徴を代表して論ずることができると思われる。

以下、第2章では、大理石が建築の中でどのように用いられていたのかを示した記述から、当時の大理石の利用状況を論じ、第3章では、史料の記述を通して知ることができる大理石に関する呼称、評価と価値観の特徴を明らかにしてゆくことにする。

2. 建築内装への大理石の利用状況

2.1 建築内装への大理石の使用

後の史料から確認される限り、大理石が内装材として使用されるのは、紀元前4世紀以降のことである。この時代の同時代史料は存在せず、後のウィトルウィウス(Vitruvius)が『建築書』の中で、またプリニウス(Plinius)が『博物誌』の中で、ハリカルナッソスのマウソルス(Mausolus)の宮殿(紀元前4世紀頃)に言及されている¹¹。この宮殿は、壁面全体がプロコネソス産大理石によって覆われていたと伝えられ、化粧材として適した薄さに石材を挽き割る技術も、この宮殿のあった小アジアのカリア地域で発見されたという¹²。プリニウスは、劇場やバシリカのような公共建築の他、宮殿や個人の邸宅等、様々な建築の装飾に大理石が利用されたことを伝えている¹³。

古代ローマ時代に急増した建築装飾材としての大理石の需要は、産地での大理石板や円柱の規格化と大量生産化を推し進め、地中海沿岸の物流と経済にも大きく影響した、一大産業となっていた¹⁴。

その基盤の上に展開され、古代末期の建築内装への大理石の利用状況を最も具体的に示したのは、6世紀の皇帝の居城に関するプロコピウスの次の記述である。

「内部装飾は、天井のモザイクに至るまで美しい大理石が貼られ、垂直面ばかりでなく床も全面同様である。¹⁵」

ヴォールトのモザイク装飾に対応して、その下の壁面には大理石板による化粧仕上げが施されていたことがわかる。このような大理石による内装仕上げに関する記述は、アクイタニアのポンティウス・レオンティウス(Pontius Leontius)の邸宅に関するシドニウスの記述の他¹⁶、次のように教会堂の内装に関するものもある。

「中央には様々な色の石で飾られた教会が建ち、(中略)壁と床の両方が大理石によって飾られている¹⁷。」

古代末期に、建築壁面の化粧材として板状の大理石が繁用されていたことは、301年のディオクレティアヌス帝による『最高公定価格令』に記載された大理石の価格表示の際の単位 $\pi o(\acute{\upsilon}c)$ が、石の容積ではなく、大理石板1平方ピエディあたりを示していたということにも反映されている¹⁸。

6世紀の建築内装用大理石で最も注目を集めたのは、首都コンスタンティノポリスのハギア・ソフィア大聖堂であった。この聖堂の見事な大理石は、プロコピウスなど同時代の著述家たちの賞賛的であった。地震によって崩壊したドームの再建が完了した562年の献堂式にあたって詠まれた、宮廷詩人パウルス・シレンティアリウスによる詩には、その美しさがより具体的に描写されている。その記

〔写真1〕ハギア・ソフィア大聖堂身廊西側壁面(写真:ハギア・ソフィア学術調査団)

述は、プロコネソス大理石による象嵌装飾や、縞模様の大理石を鏡面对称に壁面に貼り合わせてゆく職人の技術、また、床一面に敷き詰められた舗床用の大理石と、堂内各所に及ぶ¹⁹。大聖堂の身廊の壁面には、現在も、上部架構起拱点に対応する床から23mの高さまで、多色大理石による化粧仕上げが残っており、大理石の円柱・角柱は100本に及ぶ。6世紀の献堂時には、モザイク面を除く壁面全てに大理石が用いられていたことを考えると、6年弱という限られた工期で完成させるためには、大理石が非常に広い地域から計画的に収集運搬され、多数の専門化した技術者によって施工されていたことが推察される。

2.2 大理石の供給方法

古代の大理石産業、加工、輸送システムに関しては、既に多くの考古学的、社会・経済学的研究の成果がある²⁰。『最高公定価格令』の存在も、4世紀の時点で既に帝国内での大理石の規格化と流通システムが確立していたことを裏付けるものと言える。しかし、建築内装用の大理石を効率的に入手することが可能となったとは言え、高価な大理石を多用した建築は、発注者の豊かさの証であった。

5世紀には、教会堂建設にあたって、「寄付」による大理石の供給方法が記されている。主教ポルフェリオス(Porphyrus)の従者は、焼失したガザの大聖堂の再建時の状況を次のように記した。

「主教はその手紙を読み、図面を見て喜んだ(中略)さらに手紙には、高価な円柱と大理石の発送のことが示されていたのである。(中略)翌年、皇妃エウドクシアは約束していた32本の見事なカリストス産大理石の円柱を送った。これは現在教会の中でエメラルドのように輝いている²¹。」

5世紀頃から、それまでの接収や国家補助に代わり、教会の財産は、個人と帝室の寄付に大きく依存するようになる。しかし教会建設にあたり、大理石を寄付したのは権力者ばかりではなかった。ガザでは、6世紀の聖ステファノス聖堂の建設時に、大理石の産地から寄贈を受けたというコルキオスの記録がある。

「(その教会は)あらゆる有名な大理石の産地から寄贈を受けており、(中略)…それらの大理石から二つの効果が得られる：上品な出来栄と、見るものが感嘆し、同時にその提供者を称えることで、それらを贈った産地の都市の栄誉の源となることである²²。」

コルキオスによると、プロコネソスやラコニア、カリストス、カ

リア、テッサリアなどの著名な大理石の産地は、採石に適した条件を備えた一流の大理石産地であるという誇りから、教会堂に円柱や大理石板の寄付を行っていた²³。大理石産地が街を挙げて名誉を優先するようになっていたことと同時に、教会の権威が確立され、皇帝同様、富を集める存在となった、6世紀の社会的背景を読み取ることができる。

また、ガザの大聖堂の再建にあたっては、焼が残った大理石片の転用の様子も記されている。

「全てのものが取り除かれると、主教は、女性の立ち入り等が禁じられていた聖なる場所へ続く場所といわれる *Marnerion* の大理石からの瓦礫を教会の前の開かれた空間に舗床するよう命じた。それによって今度は男性に踏まれるばかりでなく女性や犬、豚、牛も踏むことになるだろう。これを熱心な信者達は教会の火災以上に愁いた。そのため、それら、特に女性は、今日に至っても大理石の上を歩かないのである²⁴。」

一度聖域に用いられたことのある大理石は、転用後も聖性を帯びると考えられていたこともわかる。

以上の記述から、古代末期・初期ビザンティン時代の建築内装における大理石の利用は、建築の公私、宗教建築、非宗教建築を問わず、地中海沿岸の各地域で、主要な建築に繁用されていたことが知られる。そして、代表的な大理石装飾は、円柱と壁面、床面の化粧材としての大理石板であった。このような建築内装への大理石利用の普及に伴い、材料供給には様々な形が生まれ、殊に大理石産地の存在も重要性を増したことがわかる。

3. 同時代史料から明らかになる大理石の特徴

3.1 大理石の呼称

大理石の呼称の問題は、現在では言語圏や学問分野により異なるため、史料の表現にも左右される建築史研究において、どの基準を適用するかは困難な問題である²⁵。従って同時代史料から当時の呼称を確認することは重要な課題となる。

大理石の種類を、色や模様の特徴に従って称することが多い現代と異なり、古代ローマ時代の著述家は、石材に対する比較的専門的な記述を遺したプリニウスばかりでなく、スタティウス(Statius)のような詩中においても²⁶、大理石の種類を区別する際、通常その産地名に拠っていた。主に白い大理石に関してのみ言及したウィトルウィウスも、パロスやプロコネソス、ヘラクレア、タソス等、産地名を冠して述べている²⁷。ただし、「紫(*porphyra*)の」石という色が岩石名になったポーフィリー(斑岩)、人名に因んだというルクルス大理石だけは例外である²⁸。また、採石場での現場作業員らは、色や模様に拠った別称を用いたこともあった²⁹。

史料における産地名による大理石の呼称は、古代末・初期ビザンティン時代においても基本的に共通する。シドニウスは書簡の中で、「もしあなたが大理石についてお聞きになるなら、それらは確かにパロス、カリストス、プロコネソス、フリュギア、ヌミディア、スパルタからのもの・・・³⁰」

と記し、やはり古代ローマ時代同様、大理石を産地によって分けている。パウルス・シレンティアリウスがハギア・ソフィア大聖堂の内装に用いられた大理石を挙げる場合も同様である。

産地名の表記は、ストラボン(Strabon)に代表される古代ローマ時代以来の地理学の発展によるところが大きい³¹。これらの産地がギ

リシャ、小アジア、エジプトという、往時の人々にとって大いに歴史や神話と結びついた場所であったこととも関連するとニョリは指摘する³²。また、エジプトやヌミディアなど、遠方からもたらされる大理石は、産地名が希少性を示す効果もあったと考えられる。ただし、史料に大理石の種類を表記することに対する積極性は、著述家によって様々である。例えば、ユスティニアヌス帝の偉業を讃える目的で書かれたプロコピウスの『建築について』とハギア・ソフィア大聖堂の献堂に際して捧げた詩であるパウルス・シレンティアリウスの記述は、共に皇帝を礼賛するための記念の性質の史料である

史料 色	プリニウス『博物誌』 1C	ディオクレティアヌス 『最高公定価格令』 4C	価格 ³³	パウルス・シレンティアリ ウス『聖ソフィア』 6C	注
赤紫	Rubet porphyrites (赤ポーフィリー)	μάρμαρος Πορφύρεϊου (紫大理石/ポーフィリー)	250	(λίθος) Πορφύρεου (紫石/ポーフィリー)	34
	Marmor Luculleum (ルクルス大理石)	μάρμαρος Λυκούλλειου (ルクルス大理石)	150	—	35
	—	—	—	(μάρμαρος) Ἰασίου (イアッソス(大理石))	36
緑	Marmor Lacedaemonium (ラケダイモン大理石)	μάρμαρος Λακεδαιμόνιου (ラケダイモン大理石)	250	(μάρμαρος) Λακκαίου (ラコニア(大理石))	37
	—	μάρμαρος Θεσσαλίου (テッサリア大理石)	150	Ατράκτις (アトラックス(からの))	38
	marmore Carystium (カリストゥス大理石)	μάρμαρος Καρύστου (カリストス大理石)	100	(μάρμαρος) Καρύσου (カリストス(大理石))	39
黒系	—	—	—	Κελτίς (ケルト(からの))	40
黄色	marmor Numidicum (ヌミディア大理石)	μάρμαρος Νουμηδικού (ヌミディア大理石)	200	Λύθιου (リビア(の))	41
	Onuchem (オニキス)	—	—	ὄνυχ オニキス	42
	Alabastrites (アラバスター)	—	—	—	43
淡紫 (斑)	(marmor) Phrygium (フリュギア大理石)	μάρμαρος Δοκιμηνίου (ドキミア(大理石))	200	(μάρμαρος) Φρύγιου (フリュギア(大理石))	44
	—	μάρμαρος Σκυριανού (スキロス大理石)	40	—	45
灰	(marmor a) Lesbo (レスボス大理石)	μάρμαρος Λέσβου (レスボス大理石)	50	—	46
白	marmor Proconnesium (プロコネソス大理石)	μάρμαρος Προκοννήσιου (プロコネソス大理石)	40	(μάρμαρος) Προκοννήσιου (プロコネソス(大理石))	47
	(marmor a) Tasio (タソス大理石)	μάρμαρος Θάσιου (タソス大理石)	50	—	48
	marmor Hymettium (ヒュメッテス大理石)	—	—	—	49
	(marmor a) Paro (パロス大理石)	—	—	—	50
	marmor Lunense (ルナ大理石)	—	—	—	51

〔表1〕 史料による大理石の表記の比較

が、大理石の類別に対する姿勢は全く異なり、プロコピウスは色の違いを詩的表現で示すのみである。

表 1 に、記述された大理石の種類が多かった 3 種類の史料から、既往研究で種類の同定がなされている大理石の呼称を、色ごとに示した。『最高公定価格令』では、19 種類の石材が列挙されているが、このうち種類が同定されていない 6 種類と、花崗岩 2 種類は表から除いた。この表からは、大理石の呼称がほぼ産地名に従っていたことがわかるが、表記は時に、『最高公定価格令』でドキミア大理石と示されていた大理石が、他の史料では、より広い地域名に由来するフリギア大理石と呼ばれ、同様にテッサリア産大理石がアトラックス産と呼ばれる等、厳密なものではなかったことがわかる。さらに、1 世紀のプリニウスの頃には種類の多かった白い大理石が、4 世紀、6 世紀には減り、逆に 1 世紀にはなかったイアッソス産の大理石が 6 世紀のパウルス・シレンティアリウスには記されていることもわかる。もとより、史料への名前の有無が即ち存在の有無というわけではないが、頻繁に記録に残されている大理石は、それだけ良く知られ、繁用された大理石であったと考えることは可能である。

3.2 大理石の評価と価値観

史料からは、大理石そのものに関する情報ばかりでなく、同時代人による特定の大理石に対する評価、価値観を示す記述が看取される。既に古代ローマ時代、プリニウスは、ギリシャ時代には価値がなかった斑紋状の大理石が、彼の時代になって好まれていたことを述べている⁵²。確かに、古代末以降の史料には他の大理石と比べて頻繁に斑状のフリギア産大理石が登場する他、遺構からも多くの斑状、礫状の模様のある大理石の部材が発見されている。また、古代末期の史料や遺構からは、緑色のカリストス産大理石に代表される縞模様も確認される。白色系大理石を繁用したギリシャ時代と異なり、ローマ時代以降、建築の類型と機能に関わらず装飾の目的で大理石が多用されるようになると、色彩美と光沢は、大理石の重要な特性と考えられるようになった。

古代末期の大理石の相対的な価値を明示す初の史料が、301 年の『最高公定価格令』である。19 種類の大理石のうち、最も高価なのは、エジプト産の赤紫色ボーフィリーとギリシャ産の緑色ボーフィリー(1 平方ピエディあたり 250 ディナール)で、次に黄色や赤、緑色の大理石や花崗岩が続く(同 200~100 ディナール)。一方、白色系の大理石は 40~50 ディナールと価格付けされている⁵³。すなわち、白色系の大理石は大理石の中でも一番安い価格帯で扱われており、最も高価なボーフィリーとは、値段にして約 5、6 倍もの差があった。古代から多用されていた斑状の模様をもつドキミア大理石は 200 ディナール、礫状のテッサリア大理石は 150 ディナール、縞状のカリストス大理石は 100 ディナールと、大理石の中では中ほどの価格になっている。

紫色の石が大変重視されたのは、皇帝の石棺にテーベ産のボーフィリーを用いた古代ローマ時代以来の伝統である。ガザの聖ステファノス聖堂(6 世紀)に関する次の記述には、ボーフィリーが聖域に用いられた例が示されている。

「円柱のなかでも注目されるのは、自然によって皇衣の色に染められた

4 本で、それらは聖職者にのみ許された区画の境界を区切っている⁵⁴。」

紫色のボーフィリーは、精緻な象嵌装飾に使用され、聖域や洗礼堂といった重要な場所に用いられることが多い⁵⁵。パロスの教会につ

いては、紫色の石に関する次のような記述がある。

「・・・壁にも円柱と同じ紫色の石が貼られている。職人はとても丁寧に石の仕上げをしており、壁はまるで紫色の布をかけたようだが、その石の光沢は真珠の輝きを超えて水面の輝きのようだ⁵⁶。」

この表現からは、色彩とともに、丁寧な仕上げによる石材表面の光沢にも注目していることがわかる。

この他、同時代史料においては、やはり大理石の鮮やかな色彩模様の美しさが記されている。ハギア・ソフィア大聖堂の内装に用いられた多色大理石について、パウルス・シレンティアリウスのように大理石の産地名で記すことがほとんどなかったプロコピウスは、一方でその色彩の美しさを見事に表現している。

「教会を飾っている円柱と大理石の美しさを、いったい誰が物語ることができたであろうか。満開の花々が咲き乱れる草原に立つとでも想像したらよいであろうか。あるところには紫の色调が、別の場所には緑が、そして真紅の花がこちらに、白い輝きがあちらに。それは自然が画家となって色の対比の粋を尽くしているかのようであった⁵⁷。」

「それらの大理石のうちの幾らかは、スパルタ産のエメラルドのようなもので、他のは炎を模したものなどがある。その他の大部分は白色だが、無地ではなく、青色の波打つ模様のあるものである⁵⁸。」

ギリシャに産する緑色系の大理石を「エメラルドのような」と喩える傾向や、結晶状の石材に対する嗜好には、ハギオス・ポリエウクトス聖堂の遺構から発見された宝石や色大理石を格子状に象嵌した円柱、あるいはラヴェンナのモザイクに描かれた類似の円柱が想起され、初期ビザンティン時代の華やかな装飾を好む傾向が伺える。

6 世紀初頭のカッシオドルスによれば、ラヴェンナでは、「縞模様を上手に組み合わせ、自然の様相を見事に再現できるような」腕のいい大理石職人を求めたということが知られる⁵⁹。これは、模様をもつ大理石の用い方に関する、同時代人のこだわりを示す史料である。縞模様の模様あわせは、左右、或いは上下対称に、鏡像対称に大理石版を配置する方法が一般的で、模様あわせが認識しやすい大きなうねりの縞や斑紋状、結晶状の模様を持つ大理石が用いられた。4 世紀頃より洗礼堂や教会の壁面に美しい色大理石の化粧仕上げが施されていたラヴェンナには、このような鏡像模様あわせにこだわった例が今も見られる⁶⁰。中でも、サン・ヴィターレ聖堂では、イア

【写真2. サン・ヴィターレ聖堂 ピアの大理石】

ッソス産大理石の大きな縞模様が見事な鏡像対称模様を描いている⁶¹ [写真2参照]。この大理石を産したカリヤ地方のイアッソスは、4世紀頃から知られ始めた比較的新しい石切り場であった。初期ビザンティン時代から、模様が躍動的で大きく、高貴とされた赤紫色系の石であることから、急速に需要が広まり、ビザンティン時代には、壁面の中央など視線の中心となる位置や、空間構成の重要部位に用いられた⁶²。

3.3 史料に記された大理石の意味

同時代の著述家達は、どのような目的で建築に用いられた大理石を記述したのだろうか。『最高公定価格令』のような法令や、地学的記述を目的とする場合を除き、同時の著述家の関心は、大理石そのものの性質を伝えることよりも、その美しく高価な大理石を備える建物の豪華さを讃えることが大きな目的であった。1世紀のプリニウスは、高価な大理石の建築内装への利用を非常に贅沢な行為として批判的に伝えたが⁶³、古代末期以降、そのような石材使用は、シドニウスの記述に見るように⁶⁴、建築主の財力を讃える好意的な表現となった。プロコピウスによるハギア・ソフィア大聖堂の描写を見てみよう。

「(陽光が大理石に反射した)その内部空間の輝きは、太陽の光を受けてというより、空間自らが内側から光を発しているようだ⁶⁵。」

「そして折るためにこの教会に來た者はすぐに、この偉業は人間の力や技術によってなされたのではなく、神の思し召しによってなされたのだと解るのだ⁶⁶。」

ニョリが指摘する⁶⁷、ユスティニアヌス帝以降のビザンティンの文学において、建築に用いられた高価で珍しい大理石を、皇帝の偉業を誇張して讃える絶好の素材として利用する傾向は、この例からも確認することができる。

これまでの引用から、4世紀から6世紀までの同時代史料に記された大理石は、多くの場合、比喻を用いて表現されていたことが確認できる。大理石の色彩と模様の美しさは、例えば床面の白い大理石は雪に⁶⁸、緑の大理石はエメラルド⁶⁹、というように、自然界の事象に喩える方法で表現されていた。時代は遡るが、ローマ時代の即興詩集の中で浴場や個人の邸宅、皇帝の宮殿などの内装材に使われた大理石を描写しているスタティウスも、大理石の色彩や模様を、草や海に喩えていた⁷⁰。このような比喻表現は、古代以来の史料に共通の特徴であり、ユスティニアヌス帝期の建築描写では、この種の比喻によって大理石の美を表現することが、豪華な建築を描写する便利な手段になったと考えられる。

4. 結

大理石による建築内部の装飾は、ユスティニアヌス帝による旺盛な建設活動の時代に一つの頂点を迎える。史料に描写された記述は、初期ビザンティン時代の重要な建築において、円柱のほか、壁・床面が、モザイクか金、絵画などで装飾されたヴォールト起拱点に至る高さまで、大理石の化粧板で覆われていたことを示している。

古代末期、初期ビザンティン時代の建築内装に盛んに利用された大理石の文化は、古代ローマ時代に確立した基盤の延長線上にあった。しかし、そこには古代とビザンティン時代に共通する特性、および異なる特性の両方が見られる。産地名を用いる呼称、比喻表現を用いて強調されていた大理石の色や模様に対する嗜好、紫色を高

貴な色とする伝統は、全てローマ時代から共通する。それは、古代末期の知識人の間で、古典古代の文化を身に付けることが教養とされていたことを考慮すれば⁷¹、自然な結果と言えるかもしれない。さらに、ハギア・ソフィア大聖堂に要したような、大量の大理石を短期間で調達する技術も、水上運搬技術や大量生産、規格化が進められた古代ローマ時代の基盤の上に可能となった。

一方で、同時代史料からは、古代末期、初期ビザンティン時代の大理石利用には、古代ローマ時代の伝統を継承するのみでなく、その時代特有の特徴もあったことが看取される。比喻表現の対象となったのは、より鮮やかな色や模様、光沢をもつ大理石であり、縞などの模様を活かした大理石の鏡像対称な模様合わせの技法は、イアッソス産大理石やプロコネソス産大理石など、明瞭な縞模様をもつ大理石の普及を後押しした。大理石の価値に着目した寄進行為や、大理石を通じた建築と建築主を讃える表現が、教会堂や皇帝関連の施設に向けられるようになるのも、初期ビザンティン時代の特徴であった。

以上、古代末・初期ビザンティン時代の史料に記された建築の内装用大理石に関する記述を検討し、先行する古代ローマ時代からの影響や社会的背景とも結びつけた同時代人の大理石に関する表現と価値観を整理した。本稿で論じたこのような同時代人の視点からの理解は、遺構の建築調査のみからは得ることのできない内容であり、これまでの遺構調査で確認された状況を考察し、古代末・初期中世の建築における大理石材の利用を体系的に捉える上での基盤を成すものである。

注)

¹ 大理石は、地質学的には「石灰岩が再結晶作用を受けてほとんど方解石の結晶のみからなる緻密な粒状の集合体で、結晶質石灰岩ともいう。(中略)商業的には装飾や工芸品・美術品用に使用される石灰質岩石および類似岩石の石材の総称で、非結晶質石灰岩やオニックス・トラバーチン・スカルン・蛇紋岩なども含まれる」とされる(『新版地学事典』平凡社、1996による)。装飾材としての大理石を対象とする本稿では、これまでの建築学の慣例に従い、オニックスや石灰質岩石等を含めた内装用石材全般を含めた広義の大理石と称することにするが、近年、このような曖昧な言葉の使用を疑問視する意見もある(D.P.S.Peachcock, 'Roman stones', *Journal of Roman Archaeology* 7, 1994, pp.362-363 参照)。

² 深見奈緒子、日高健一郎、岩出まゆ「ハギア・ソフィア大聖堂の内装石材について」、ハギア・ソフィア学術調査団『研究成果報告会報告集』、2001.3、pp.77-89、岩出まゆ、高根沢均、日高健一郎「サン・ヴィターレ聖堂における8基のピアの表装石材について—ハギア・ソフィア大聖堂とユスティニアヌス帝時代の教会堂建築(2)—」、『2002年度大会学術講演梗概集』、pp.7-8、2002.8 参照。

³ M. Guarducci, *L'epigrafi greca dalle origini all'eta' imperiale*, Roma, 1986, pp.152-4, M. Giachero, *Edictum Diocletiani et Collegarum de pretiis rerum venalium*, Genova, 1974.

⁴ Sidonius Apollinaris, *Poems and Letter*, English trans. by W. B. Anderson, Loeb Classical Library, 1963, 解釈には、R. Gnoli, *Marmora romana*, Roma, 1988 を参照。

⁵ Mark the deacon, *The life of Porphyry, bishop of Gaza*, the Clarendon Press, 1913(原文参照できず)

⁶ R. Forester, *Choricii Gazaei opera*, Leipzig, Laudatio Marciani I, II, 1929, 解釈には C. Mango, *The art of the Byzantine Empire 312-1453*, 1986 を参照。

⁷ Procopius, *De aedificiis*, ed. H. B. Dewing and G. Downey, *Procopius: Buildings*, VII, Loeb Classical Library, 1961

⁸ Paulus Silentiarius, *Descriptio ecclesiae sanctae sophiae*, PG, tom.86., Paris, 1865, 解釈には Lethaby & H. Swinson, *The church of Sancta Sophia Constantinople: a study of Byzantine Building*, New York, 1894 を参照。

⁹ Cassiodorus, *Magni Avrelii Cassiodori Senatoris Opera*, Paris, 1973,

¹⁰ Plinius, *Pliny: Vol. 7*, with an English tr. by H. Rackham, Loeb classical library, London, 1963, 解釈には、中野定雄[ほか]訳、『プリニウスの博物誌』、雄山閣出版、1986 を参照。Vitruvius, *Vitruvius on architecture* 1, ed. from

the Harleian manuscript 2767 and tr. into English by Frank Granger, Loeb classical library, 1931. 解釈には、森田慶一訳注『ウィトルーウィウス建築書』、東海大学出版会、1974。Statius, *Statius; I*, with an English translation by J.H. Mozley, Loeb classical library, 1928.

¹¹ H. Mielsch, *Buntmarmore aus Rom im Antikenmuseum Berlin*, Berlin, 1985, p.18. Plinius, *Ibid*, Libro XXXVI, 47. Vitruvius, *Ibid*, II, VIII, 10.

¹² Plinius, *op.cit*, XXXVI, 47

¹³ Plinius, *op.cit*, XXXVI, 47

¹⁴ 古代ローマ時代における大理石の生産と輸送に関しては大変研究が進んでいる。中でも Ward-Perkins に詳しい。H.Dodge and B.Ward-Perkins, *Marble in Antiquity: Collected papers of J.B.Ward-Perkins*, British school at Rome London, 1992, J. Clayton Fant, *Ancient Marble Quarrying and Trade*, BAR International Series 1988

¹⁵ Procopius, *op.cit*, I, x, 19, 'γαυροῦνται οὖν καὶ μειδιῶσι τῷ βασιλεῖ νέμοντες ἐπὶ τῷ ὄγκῳ τῶν πεπραγμένων ἰσοθέους τιμὰς ἡμφίστασι δὲ μαρμάρων εὐπρεπεῖα τὰ ἐντός ἅπαντα μέχρι ἐς τὰς ὑπεράνω ψηφίδας, οὐχ ὅρα ἐπανεόσθηκε μόνον, ἀλλὰ καὶ τὸ ἔδαφος ἐφελξῆς ὅλον.'

¹⁶ 「その家の壁は、金色の天井のところまで大理石版が貼られている (sectilibus paries tabulis crustatus ad aurea tecta venit,...)」Sidonius, *op.cit*, XXII, vv. 146-149

¹⁷ アナブルスの大天使教会 (Church of the Archangel) について。Procopius, *op. cit.*, I, viii, vv.12-13. 'ἐπὶ μέσῳ τὸ ἱερὸν χρώμασι μυρίοις πεποικιλται λίθων./...τὸ τῶν μαρμάρων ἐπίχαρι, οἷς δὴ οἱ τε τοῖχοι καὶ τὰ ἐδάφη παντάπασιν περιέβληνται'

¹⁸ 碑文には、'...f̄ ā *ov... (…ἱνοῦς または δα)あたり 250 ディナール)' というように記されている。次の研究の中で、ディオクレティアヌス帝の価格令の示す単位が、それまで考えられていたような 1 立方フィートではなく、1 平方フィートである可能性が強いことが、当時の石材の輸出形態やコストの計算に基づき慎重に割り出されている。Simon Corcoran and Janet DeLaine, 'The unit measurement of marble in Diocletian's Prices Edict', *Journal of Roman Archaeology* 7, 1994, pp.263-273

¹⁹ Paulus Silentiarius, *op.cit*, 352, 567, 615-640,

²⁰ 上記注 14 参照。

²¹ Mark the deacon, *op.cit*, 75, 84 (原文参照できず)。

²² R. Forester, *op.cit.*, *Laudatio Marciani II*, 35-36, p.37 解釈には Mango, *op. cit* 参照。'τὰ δὲ τοῦτοις ἀκόλουθα, πῶσα περὶ φανῶν μαρμάρων πατρὶς ἐνταῖθα δωροφορεῖ. κοινὸν δὲ κέρδος αἱ πλάκες καὶ τῷ τεμένει πρὸς ἐργασίαν εὐσχήμωνα καὶ ταῖς πόλεσιν εἰς ἀφορμὴν εὐδοχίας' ὁ γὰρ ἰδὼν καὶ θαυμάσας εὐθύς ἐπαινεῖ τὴν πέμψασαν πόλιν.'

²³ R. Forester, *op.cit.*, *Laudatio Marciani I*, 41-42, p.12-3. 解釈には Mango, *op. cit*, p.69 参照。

²⁴ Mark the deacon, *op.cit*, 76 (原文参照できず)

²⁵ 現在最も古代の大理石に関する研究の進んだイタリアでは、ほぼ全ての大理石を色と模様の特徴に基づくイタリア語名で呼んでいるが、ドイツ語、英語圏では史料のラテン語表記に倣う場合も多い。地質学的分類では、ポर्फアイリー、オニキス、礫岩以外は色や模様にかかわらず「大理石」という学名になる。

²⁶ Statius, *Carmina*, XXII, vv.136-141; *Silvae*, I, 2, vv.147-151, II, 2, vv.89-93 他 (*Statius; I*, Loeb classical library, 1928)

²⁷ Vitruvius, *op.cit*, X, II, 15

²⁸ Plinius, *op.cit*, XXXVI, 49

²⁹ 例えば、ルクルス大理石は工人によってアフリカーノ (Africano) と呼ばれたというが (G.Borghini, *Marmi Antichi*, 1998, p.133)、この呼称はまた、北イタリアで伝統的にイアッソス (カリア) 大理石の呼称でもあった。(I.Florentini, P. Orioli, I marmi antichi di San Vitale, Stefano Casanova editore, 1997, p.75)

³⁰ Sidonius, *Letter*, II, 2, 7, Clermont-Ferrand 近郊の Villa について。'iam si marmora inquiras, non illic quidem Paros Carystos Proconnesos, Phryges Numidia Spartitae rupium variatarum posuere crustas,...'

³¹ *The geography of Strabo*, 1-8. with an English translation by Horace Leonard Jones. Harvard Univ. Press, 1917-49 (Loeb classical library).

³² Gnoli, *op.cit*, p.35

³³ 1 立方ピエディあたりの価格 (単位ディナール)。

³⁴ エジプト産の赤紫色の斑岩。

³⁵ 小アジアのテオス産の赤、黒、白色などが雲状に混じった大理石で、アフリカーノとも呼ばれる。

³⁶ 小アジアのカリア地方に産する赤、灰、白の大きな縞模様的大理石。カリア大理石、或いは模様から、チボッリーノ・ロッソ (赤い玉ねぎ) と称される。

³⁷ ギリシャに産する深緑色の斑岩。セルペンティーノ (蛇紋岩) と呼ばれる。

³⁸ ギリシャに産する深緑、緑、白などの混じった礫岩。ヴェルデ・アンティーク (古代の緑) と称される。

³⁹ エウボエア島に産する緑と白の縞模様的大理石。模様からチボッリーノ・ヴェルデ (緑の玉ねぎ) と称される。

⁴⁰ ビレネー山脈に産する黒と白の礫岩状模様。ピアンコ・エ・ネーロ・アンティコ (古代の黒と白) と称される。

⁴¹ スミディア産の深い黄色の大石。ジャッロ・アンティーク (古代の黄) と称される。

⁴² オニキス。エジプト産とカッパドキア産が知られるが、古代においてはアラバスターと混同されていることが多い。

⁴³ エジプト産のアラバスター。古代においてはオニキスと混同されていることが多い。『最高公定価格令』の中にはアラバスターに類似する Αλαβαστηροῦ と記された石名が見られるが、表示された価格が安すぎることから、高価とされていたエジプト産のアラバスターとは異なると考えられている。R. Gnoli, *op.cit*, p.16

⁴⁴ 小アジアに産する斑状の大石。近郊のシノッド (シナダ) の名称で呼ばれたり、バヴォナツェット (暗い赤紫色を帯びた) と称されることもある。

⁴⁵ ギリシャに産する深い赤紫の地に白い斑紋の浮かぶ礫岩。

⁴⁶ 小アジアに産し。ビジオ・アンティコ (古代の灰色) と称される。

⁴⁷ マルマラ海のマルマラ島産の白、または灰色の縞模様がある大理石。

⁴⁸ ギリシャ産の白い大理石。

⁴⁹ ギリシャ産の白地に細い灰色の縞模様の大石。

⁵⁰ ギリシャ産のきめの細かい白大理石。

⁵¹ イタリア (現在のカッラーラ) 産の大石。

⁵² Plinius, *op.cit*, XXXVI, 44

⁵³ M. Guarducci, *op.cit*, pp.152-4, M. Giaccherio, *op.cit*, pp.210-1.

⁵⁴ R. Forester, *op.cit*, *Laudatio Marciani II*, 36, p.37 'των δὲ κίωνων οἱ κράτιστοι τέταρτες, οὓς ἔθαφεν ἡ φύσις χρώμασιν ἐσθλῆτος βασιλικῆς, διορίζουσιν ὅσον οὐ βάσιμον τοῖς εἰς ἱερὸν μὴ τεοῦσι χορόν.'

⁵⁵ イスタンブールのハギア・ソフィア大聖堂やボレチュのエウフラシアーナ・パンシカのアプスの象嵌や、ラヴェンナの正教徒洗礼堂、ローマのラテラーノ洗礼堂等の現存例がある。

⁵⁶ 6 世紀半ばのカタボリアーナ教会について。Nicetas Magister, *Acta Sanctorum*, Bruxellis, 1925, Nov, IV, *Vita S. Theoctistae Lesbiae*, ch. 3f, p.226. 解釈には C. Mango, *Op.cit.*, p.104 参照。'πρὶς τῷ τε λίθῳ πάντα τοῖχον ἡμφίστο παραπλησίως τοῖς κίουσιν. Εἰς τοσοῦτον δὲ τὸν λίθον λεπτινὰς ἐξέφανε δὲ τεχνίτης, ὥς δοκεῖν ἐξ ὑφασμάτων τὸν τοῖχον ἐνδεύεσθαι θυσοῖσιν' τὸ δὲ μαρμάρων τοῦ λίθου τοσαύτην ἐνέφαινε τὴν ὑγρότητα καὶ μαρμαρυγὴν,...'

⁵⁷ Procopius, *op. cit.*, I, i, vv.59-60, 'τίς δὲ τῶν τε κθόνων καὶ λίθων διαριθμήσαιο τὴν εὐπρέπαι, οἷς τὸ ἱερὸν κεκαλλώπισται λειμῶνι τις ἂν ἐντετυχηκέναι δοξείεν ὥραιῳ τὸ ἄνθος. Θαυμάσειε γὰρ ἂν εἰκότως τῶν μὲν τὸ ἀλουργόν, τῶν δὲ τὸ χλοῶζον, καὶ οἷς τὸ φοινικιοῦν ἐπανθεῖ καὶ διττὸ λευκὸν ἀπαστράπτει, ἔτι μέντοι καὶ οἷς ταῖς ἐναντιωτάταις ποικίλλει χροαῖς ὥσπερ τις ζωγράφος ἡ φύσις.'

⁵⁸ Procopius, *op. cit.*, I, x, vv.20, 皇帝の宮殿について。'τῶν δὲ μαρμάρων ἕνα μὲν λίθου Σπαρτιάτου ἐκεῖ σμαράγδα ἴσα, ἕνα δὲ πυρὸς φλόγα μμοῦνται' λευκὸν δὲ τῶν πλειόνων τὸ εἶδος, οὐ λίτον μέντοι, ἀλλ' ὑποκυμαίνει κυαναυγὲ ὑπογεγραμμένον μεταξύ χρώματι.'

⁵⁹ Cassiodorus, *op.cit*, 'Variarum I, VI, Theodericus Rex, a.507/509'. 'Quicquid in aula paraedificabili ammiratione fundativit, magnitudini tuae studiosissime delegamus, ut secundum brevem subter anneau de urbe nobis marmorarios peritissimos destinatis, qui eximie divisa coniungant, ut venis colludentibus illigata naturalem faciem laudabiliter mentiantur.'

⁶⁰ やや時代の下がった 9 世紀のアグネルス (Agnellus) によると、S.アポリナレ・ヌオーヴォ (S. Apollinare Nuovo: 493-526) 聖堂の壁を多色大理石で覆った他、床には石材による象嵌 (lithostratis) 舗床がなされたという。Liber Pontificalis ecclesiae Ravennatis, ed. O. Holder-Egger, *De Agnello*, cc.86, 解釈には伊訳 M.Pierpaolo, *Il libro di Agnello storico*, Ravenna, 1988, p.106 参照。

⁶¹ ただし、現在のこれらのカリア産大理石は、19 世紀後半から行われた修復によってデザインには変更を受けている。

⁶² ハギア・ソフィア大聖堂ではアプシスの象嵌細工や側廊の壁面のパツレズの中央部、ラヴェンナのサン・ヴィターレ聖堂でも、壁面やピアの中央のように、壁面区画の中央部に配されている。

⁶³ Plinius, *op.cit*, XXXVI, 47

⁶⁴ 上記注 16 参照。

⁶⁵ Procopius, *op. cit.*, I, i, v.30, 'φαῖνς ἂν οὐκ ἔξωθεν καταλάμπεσθαι ἥλιω τὸν χῶρον, ἀλλὰ τὴν αἴγλην ἐν αὐτῷ φύεσθαι, τοσαύτη τις φωτὸς περιουσία ἐς τοῦτο δὴ τὸ ἱερὸν περικέχεται.'

⁶⁶ Procopius, *op. cit.*, I, i, v.61, 'ὁπνῆκα δὲ τις εὐδόκως ἐξ αὐτοῦ τοῖ, ξυνίησι μὲν εὐθύς ὥς οὐκ ἀνθρωπεῖα, δυνάμει ἢ τέχνῃ, ἀλλὰ θεοῦ βοήθῃ τὸ ἔργον τοῦτο ἀποτετόρνεντι.'

⁶⁷ R. Gnoli, *op. cit.*, p.40

⁶⁸ アカキウス聖堂について述べる次のプロコピウスは、燦然と輝く堂内を雪に喩えた。'床も円柱と似た石で覆われており、ここから反射した輝く光は、教会全体が雪で覆われたかのような印象を与える (Procopius, *op. cit.*, I, iv, 25-6)'

⁶⁹ Procopius, *op. cit.*, I, x, vv.19-20, Vita Porphyrii, 84,

⁷⁰ Statius, *Silvae*, *op. cit.*, I, ii, vv.147-51 等。

⁷¹ Peter Brown, *The world of Late Antiquity*: AD150-750, London, 1971, 2, 4, 富島直機訳、『古代末期の世界—ローマはなぜキリスト教化したか—』、刀水書房 2002 年、第 2 章、第 4 節参照。

(2003 年 2 月 10 日原稿受理, 2003 年 7 月 29 日採用決定)